

THE KANSAI UNIVERSITY BULLETIN

Osaka, September 30th, 1958, No. 319.

關西大學學報

昭和33年9月 第319号

昭和二十六年十月十五日第三種郵便物認可
昭和三十三年九月三十日発行（毎月一回三十日発行）
通卷三一九号



西徳高コブ尾根（山岳部撮影）

關西大學出版部

經濟・政治研究所の機能と使命に就いて

井上吉次郎

文学部 教授
經濟・政治研究所長

- 第一部 經濟・社会
 - 第二部 商業・經營
 - 第三部 政治・法律
 - 第四部 文化・歴史
- 以上の通りであります。

関西大学經濟・政治研究所は、昭和三二年秋、法・文・経・商四学部から採られた各学部長を含む設立準備委員会が森川太郎博士を委員長として鋭意考究の結果設置された関西大学に所属する純粋學術研究の機関であります。三二年二月四学部々長がそれぞれ推挙した第一部乃至第四部の研究員が任命されて研究所の成立になりました。これと共に事務主事の就任があり、専任職員として事務面に万全を期することになりました。

本研究所の組織は、上記四学部の基礎に立てられ、これに対応する四部を置くことになつたが、これは申すまでもなく、研究運営上の要請に基くもので、決して部別分立を意味するものでなく、研究員は各個に研究の単位であり、全体として研究所を成立させる要員であるのであります。それ故に研究員會議が研究所運営の最高の機関と理解されます。

研究員會議は、所長及び各部幹事を選挙し学長に推薦した結果、三三年四月一日、不肖私が所長に、森川、山崎、堀、辻岡各研究員が各部幹事に任命されて、ここに事実上の発足をみたのであります。

この発足に至る組織の基礎に於いて、部別と各部の研究目標という規定が準備されてきました。

各個に研究単位であり、各別に所属し、各部研究目標に基き採られて任命されているのであります。ここで目前の現実に就いて考えますと、研究員は全員本学の教職員たるものが本務であつて研究所員が兼務の形になつています。けれども、このことは形式的のみ考えることは正当でないと思われまふ。もともと大学の教職員は、学問研究を生命とするものであつて、研究者であるが故に教職員たる地位に就けるのであります。研究室は大学教職員たる職分の生命源泉であるといわれます。

同時教室は学問実践の道場であると考えられまふ。教えるということは反面学ぶことでもあります。学習とは学生に限定さるべき心理過程でなく、教えることの準備と実践とが学問研究の結実とどんなに大きく作用するかは、多くの研究者の自覚であります。われわれは、本研究所の研究員が教職員の兼務になつていふことを外形的に見えるほどにマイナスになるものでなく、反対に利点も算え得られるものであると思つてあります。もつとも、このことは決して専任研究員を置くことの利点を否定するものではありません。多くの国立大学の研究所のように教職を持たない専任研究員に依る純粋研究活動に専念して業績示す事態の

望ましいことをいうに及ばず、また大学外の單純研究所の必要なことは今更論議の余地はありません。しかし、本研究所のように教職員の兼務たることに依つて出発させた研究機関を直ちに、その故に、無能視することは、学問研究というものの性質に対する無理解であると思われまふ。ただ、研究員たる教職員には教務負担を軽減することに依つて研究への余裕を増加する等は必要にして望ましい措置と考えられます。因に、本研究所の部別研究目標及び構成される研究員の顔色等からみて、本研究所は、その名に規定される以上に広汎に社会諸科学に就いての研究を指向するものとされます。名は実の質でありますから、関西大学經濟・政治研究所の意味を決定するのは、今後、本研究所の研究活動と業績の実践にある、といえまふ。

そこで、研究員各員は、自己の専門とする線に沿つて熱意と勤勉に依つて目的達成のために努力するものであり、その意味で各個に研究単位であることは当然であります。このことは大学教職員として在来もそこに生活々動が置かれて來ていたのであつて、研究員となつたことに依つて新たに生じた使命や機能ではないのであります。しかし、それでは研究員となることは屋上屋を架する類いであつて実質的には何の意義もないものだということは最近代に於ける学問研究の方法論を無視するものだと思われまふ。科学的研究における協働活動の必要は最近では範疇命令的でありまふ。特に複雑にして多様な社会現象を対象とする取扱いに於いて、この要請は最も痛切であります。研究は益々精密にして分業的な熟練を必要とします。即ち専門分化が著しくなります。これが、そのままに進展すれば、いよいよ個別的に分裂して遂に統一現象たる

社会現象の把握を失つてしまい、これは所期した科学そのものの実を失うことになります。専門分化には常に綜合統括の手續が用意されねばならない。近代の協同研究の重要論は、この見地に生れて来たものであります。われわれは、本学が、その各研究室から徴募して、従前あつた一、二の研究所に他に新しい決意と措置に依り、本研究所を設立した意義が、この新時代の社会科学研究方法論の要請に答えるところにあるものだ、と信じます。斯く理解すれば、われわれは、研究室の研究をたる上にまた研究所の研究員たることの意味が容易に理解され、われわれは、その任務の重大なことに留意せざるを得ないのであります。

私は、ここで、ロンドン大学 (the University College London) に交通調査センター (Communication Research Centre) を置き、その第一回調査報告を出すに際し、エヴァンス学長 (B.J. Evans, Provost) が書いた序文のことはを想起します。「教授その他の一団が集り、人間交通の諸問題の一層組織的な研究をやる必要を話し合つた。それで大学に交通調査センターを設けることを提議し、学校当局がこれを納れた。

出発に当り先ず解決を要する難しい問題にぶつ付かつた。第一に、こんな茫大な題目で、どこに限界を置いて限定するかだつた。企図を取扱い可能にするために限定が要る。第二は、専門のひどく違ふ研究者の間に協力的に論究し調査する方途の問題だつた。

第一問題は少々適宜な方式で解決した。定則で限界を規定するというやり方を避け、少くとも論究の初歩段階では、己れ的方式で参加出来るとみる教授その他はみな参加することにした。そのいう人達が会合し、

或一般原則をこさえる。そういうものから個々の論究や調査に発展させる。その顔触れのリストが何物よりも容易に交通問題の範囲領域を示唆すると思われる。

エイヤー教授 (哲学)、パーロー教授 (電気工学)、ダウンポート教授 (数学)、フライ博士 (音声学)、ホールデン教授 (生物測定学)、インゴールド教授 (化学)、カツツ教授 (生物物理学)、マツセー教授 (物理学)、メダワール教授 (動物学)、モミグリアノ教授 (古代史)、カーク博士 (英語学)、ラツセル博士 (心理学)、スミス教授 (英語学)、スザランド教授 (英語学)、ウエブスター教授 (ギリシヤ語学)、ウイルクス教授 (図書館学)、ウイリアムス教授 (法学)、ウイットコロー教授 (美術)、ウレツジ教授 (仏語学)、ヤング教授 (解剖学) 等々。また当初からセンターに所属する人達は、工場及び公企業に於ける交通の重要性を認め、大学に好意を持つ産業界指導者たる人々と有益なる会議を行つた。」

「こういう会議でサー・モンクトンが第二の問題に触れ、進歩せる研究のそれぞれの部門の専門分化と、その方法の分岐から各研究者間分離の著しいことを批判した。この困難はあり、それは過小視出来ない。けれども、幸にして他の方向に仍く要素もある。(一) 諸科学間の境界は段々破れて来ている。化学者、機械技術家、医薬学者、物理学者は今日単独孤立して仍くもでない。(二) この交通調査本部を発足させた諸科学者は、みな同一大学に付き、殆んど毎日接触している。その多くは多かれ少かれ同一年齢階級に属する。更にまた他の二つのことがあつて大いに協力を助長した。伝統的に本学は人間精神の問題、言語の問題、

交通の問題を重大関心事にして来ている。ベントム (Jeremy Bentham) が創立者の一人だつた。そしてベントムは言語問題、特に如何に言語が思考に作用するかの問題に注意を払つた十九世紀学者の就中著名なるものだつた。そもそもその始りから問題の種々相への接近が多様であつた。いかに各様に関心が払われたかをみるには少しくこれら学者の氏名を挙げれば足りる。例えば、エリオット・スミス、カール・ピアソン、ガルトン、ワトソン、ダニエル・ジョーンズがいた。問題の厳密に言語学的な面でもチャンバースその他の研究がある。ジョーンズ教授が英国に於いて大学研究課程として発音学を置くずっと前に、アレキザンダー・ベルはアメリカに渡り電話機を發明するに先立ち本学々生として言語の機構の研究に先鞭を付けていた。

斯く史的背景の好都合と共に、現在条件も好調だつた。その三、四要素を列べたが、これに加えて哲学のエイヤー教授が、その研究中で、哲学の最も重要な機能の一つは諸説述の批判にあるべきだ、ということを中心とした。そこで哲学者は諸他研究の中心にその正当な地位を確認されることになつた。」

と以上のようなエヴァンスの見解は、私に極めて大きな示唆になりました。われわれは大学当局関係諸氏の期待に答えるには微力であることを知っています。けれども正直にして勤勉に職責を尽したいと思ひます。そして、協同或は協力の結実に希望を持ちます。最近代の社会諸科学研究の方法論が到達したところのものに忠実でありたいと考えるのであります。

關西大學經濟・政治研究所規定

第一条 關西大學學則第一章第四條の規定に基き本大學に關西大學經濟・政治研究所（以下研究所という）を置く。

第二条 研究所は、ひろく社会生活に關する理論及び実態を研究調査し、もつて国民生活の向上と發展に寄与することを目的とする。

第三条 研究所はその目的を達成するために左の事業を行う。

- 一 理論的研究及び実態調査
- 二 研究及び調査の成果の發表
- 三 研究会、講演会、講習会等の開催
- 四 研究及び調査の受託
- 五 資料の蒐集、整理及び保管
- 六 その他第二条の目的達成のために必要と認められる事業

第四条 研究所に左の職員を置く。

- 所長 一名
 - 幹事 四名
 - 研究員（本学専任者） 三十名以内
 - 研究員（依頼によるもの）若 干名
 - 事務職員（主事） 一名
 - 事務職員（その他） 若干名
- 第五条 所長は学長が研究所委員会（以下委員会という）の議を経て理事会に推薦し、理事会がこれを任免する。

所長の任期は二年とし、再任を妨げない。

第六条 所長は所務を統轄し、研究所を代表する。

第七条 研究所に左の各部を置き、各部毎に一名の幹事を置く。

幹事は各部の運営に當る。

- 第一部 經濟・社会
- 第二部 商業・經營
- 第三部 政治・法律
- 第四部 文化・歴史

第八条 幹事は、本学専任者たる研究員のうちより所長が委員会の議を経て学長にこれを推薦する。

幹事の任期は二年とし、再任を妨げない。

第九条 本学専任者たる研究員は教授、助教授及び講師のうちより所長が委員会の議を経て学長にこれを推薦する。

第十条 依頼による研究員は、前条の資格を有しないものより、所長が委員会の議を経て学長にこれを推薦する。

第十一条 研究所に委員会を置く。

委員会は、所長及び本学専任者たる研究員をもつて構成する。

所長は委員会の議を経て、依頼による研究員を委員会の構成員とすることができる。

第十二条 委員会は所長がこれを招集し、議長とな

る。

第十三条 委員会は、左の事項について審議を行う。

- 一 研究所の運営に關する事項
- 二 研究調査に關する事項
- 三 研究員の任免に關する事項
- 四 予算に關する事項
- 五 その他重要な事項

附則

本規定は昭和三十三年十二月一日からこれを施行する。

経過規定

創立時に於ける第九条の研究員の推薦は、設立準備委員会がこれを行う。

所長	教授	井上吉次郎
法学部	助教授	*堀 堅士
	専任講師	原 英次
	専任講師	上林 良一
文学部	助教授	井上吉次郎
	助教授	*辻岡 美延
	専任講師	小川 隆夫
	専任講師	*森川 太郎
経済学部	助教授	松原 藤由
	助教授	越後 和典
	助教授	東井 正美
	専任講師	高本 昇
商学部	助教授	*山崎 紀男
	助教授	柏尾 昌哉
	助教授	酒井 文雄
	専任講師	末政 芳信

第九回国際宗教史会議に参加して

池田 栄

法学部教授・法博

資格を持たないもので、組織委員会の選考により準會員の名で参加を許されたものがある。

本学からは私は宗教学専攻でないが、日本人参加者の一人としてリストに登録

International Association for the History of Religions. 略称 I.A.H.R.) は広義の宗教史研究の爲の国際的機関であり、現在は我国も常置委員国となつており、オランダのアムステルダムに本部を置き、会長 (President) はイタリーのペッタツォーニ博士 (Dr. Pettazoni) (ローマ大学教授)、事務総長 (General Secretary) はオランダのブレーケル教授 (Prof. Bleeker) である。この学会を母体機関とする国際宗教史会議 (International Congress for the History of Religions. 略称 I.C.H.R.) は一九〇〇年来パリ、バーゼル、オックスフォード、ライデン、レント、ブラッセルの順に、更に戦後アムステルダム、ローマの順に開催されたが、第九回の同会議 (I.C.H.R.) はローマ會議の決定と我國の閣議決定に基づき、本年八月二十七日 (水曜) の参加者登録と懇親會二十八日 (木曜) の開會式と本會議に始まり、調査旅行、シンポジウム、研究討議、公開講演を経て、九月九日の閉會式に終つた。会場は東京産経會館ホール京都関電ホール、京大法学部第七号教室であつた。この會議は人文科学部門に於ける国際學術會議として我國最初のものであり、日本人参加者は主催者たる日本學術會議第九回 I.C.H.R. 組織委員会が選考し、正式案内状を發し、一定の手続を経て参加者 (Participants) として登録せられた正會員であり、この外に参加者の

せられた。私は民主政治の本質を考える際に、リンカンの云つた *Government of the people, by the people, for the people*……under God に於ける under God を重要視すべきであると言ふ考えから、昨今英國憲法政治の發達とキリスト教の關係、特にマーグナ・カルタとキリスト教の關係を研究發表して居り、また既に屢々宗教 (キリスト教・仏教・シナに於ける自然崇拜) と政治との關係を著書論文に發表し、また別に *Rome* 教會の機関英文雜誌 *Missionary Bulletin* に於て *Nestorianism in Japan* を執筆している。この英文論文は聖徳太子の政治に論及したもので、スイスのエグリ博士 (Dr. Egli) (京都大学講師) の依頼によつたものである。こうした研究發表のため日本人参加者としての登録を受けたと考へる。外に宗教学専攻でなく登録された日本人が少くないが、東京会場で懇談した名古屋大学の鈴木利蔵君の如き生理学専攻の医学者であり、本学文学部の広瀬捨三教授と親交ある新鋭篤学者である。また本学文学部の西洋哲学専攻の若手英才田中英三専任講師が正會員のバッジと名札をつけて至るところ大いに活躍せられていたのと京都の公開演説会場に関大生 (大学院修士課程公法専攻科松田照久君) の傾聴する姿を見たのは特にうれしかった。

中共とソ連を除く世界各国から宗教学専攻者または宗教学にも造詣深い、代表的一流学者が集合談議し、研究發表の内容はプリントにて参加者 (會員) に手渡され、この印刷物はファイルにとじて保存することができる。会場の演説や懇談に於て、英國又は米國東部地域からの代表者は標準英語とその發音で話したので、プリントの援助もあり、聞とり易く、私は東京會議に於て特にロンビア大学のブロック博士 (Dr. Block) と親しくリンカンの *democracy* 定義に就て論談し、得るところ多く、また博士はロンビア大学は本学前学長岩崎卯一博士在学当時よりその構内もはるかに大になり、ずっと立派になつてると云つたが、その他の地方からの外国人や日本人の英語のうちにはプリントのない場合、更に英語の通弁がほしい人が多かつた。勿論、日本人やドイツ人などのうちに英米人も驚く立派な標準英語で語る人を見つけたことは否定し得ない。私は昭和七年から九年にわたる満二カ年、文部省在外研究員として歐米に留學し、その大半を英國に滞在したので、標準英語にだけは少しばかり耳なれし、そのためその後、標準英語の語学的研究には素人ながら熱を持ち努力だけは続けているが、実に変則的な發音の英語には今回も少からず悩まされた。

最後に本會議が大いに成果をあげたに就ては組織委員人名譽総裁三笠宮殿下の御恩を忘れてはならないと思ふ。開會式で流ちょうなる *King's English* を以て研究を奨励せられた外、終始一貫、一刻も休まれず連続して會議又は一行のどこかに参加されていたことは参加者と準會員一同の感謝していたところであり、京大での閉會式の時ペッタツォーニ博士はこの感謝を特に強調し、最後に「プリンス三笠はこの国際宗教史會議にとつてプリンス聖徳であつた。」(Prince Mika-

学内報

法生活学術実態調査

千里山法律学会は昭和二十六年以降毎年夏期休暇を利用して、学術研究の一助として、また併せて大学の認識を昂めるため法生活実態調査を行つて来たが、本年も例年通り第八次法生活実態調査を編成、法学部中谷敬寿教授を団長とし指導員三名及び学生三十名参加、能登半島石川泉珠州市宝立町を被調査地を選び、七月二十日より一週間、(1)漁業、農業、山村関係、(2)家族関係、(3)社会構造、(4)法慣行、(5)其の他に關しての調査を行い、好成績を取めた。

上田助手シカゴ大学へ

経済学部上田昭三助手はこのたび、米国商務省「Exchange Visitor Program」に基づく一研究生として、シカゴ大学、スクール・オブ・ビジネスに一年間入学、主として金融論を専攻の予定。

十月一日午前八時山下汽船、山里丸にて神戸港より出帆した。

学会出張

◇文学部原弘二郎教授、秋山博愛助教授
経済学部荒井政治助教授は五月二十三日から二十六日まで早稲田大学における日本西洋史学会に出席。

◇文学部川崎章夫助手は五月二十九日から六月二日まで東京大学における歴史学研究会に出席

◇文学部小野勇、榎本金次郎、広岡英雄、堀正人各教授、大西昭男、星野信夫、三宅川正、秋山博愛各助教授、多田敏男、角田文雄、栗駒正和各専任講師、名取榮史、安川豊兩助手及び法学部山口辰雄専任講師は六月五日から十日まで東北大学における日本文学会に出席

◇文学部三木治、目黒三郎兩教授、小方厚彦、高塚洋太郎兩助教授、重本利一専任講師、前原昌仁助手は六月六日から十日まで東京外大における日本フランス語学会及び早稲田大学におけるフランス文学会総会に出席

◇文学部井上吉次郎、金戸嘉七兩教授は六月十日から十九日まで東北学院大学における日本新聞学会に出席

◇文学部鈴木祥蔵教授、笈田知義、本庄良邦兩助教授は七月九日から十三日まで東北大学における日本教育学会に出席

◇工学部前田春興教授は七月十四日から十七日まで東京都立大学における日本物理学会に出席



スタンプオールド大学より

資料寄贈
スタンプオールド大学フーヴァー研究所

(The Hoover Institution on War, Revolution, and Peace, Stanford University) より本学出版部宛左記資料を寄贈して来た。なお、これは本学「経済論集」寄贈に対する交換である。

THE HOOVER INSTITUTION COLLECTION ON JAPAN, Collection Survey, Number 3.
サオ・パウロ大学より

図書寄贈
ブラジルのサオ・パウロ大学 (Universidade de Sao Paulo) より左記圖書を寄贈して来た。なお、本学では各論集を寄贈し、爾後交換を行うことを約した。

REVISTA da Faculdade de Direito, Volume LI, 1956.
アメリカ法学部協会から

機関誌寄贈
本学と学術交流を行っているアメリカ

法学部協会 (Association of American Law Schools) から、この程在記機関誌を寄贈して来た。

Journal of Legal Education, Volume IO, Number 4, 1958.
ロサンゼルス法律図書館へ

「法学論集」既刊分寄贈
このほど法務大臣官房司法法制調査部

国立国会図書館支部法務図書館より、米ロサンゼルス市ロサンゼルス県法律図書館 (Los Angeles County Law Lib-

(前頁より)
sa was Prince Shotoku for this International Congress for the History of Religions) と結んで満場の喝采を博した。この結び語句は私はじめ日本人にとつて特に印象深いものであつたと考へる。

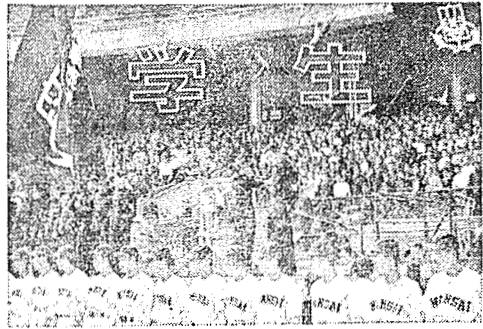
最後に一言すべきは、現在の本学には未だ宗教学専攻の専任職員が置かれていないが、宗教学専攻以外の学究の爲にも I A H R と I C H R の存在を紹介するの必要あることである。我國の学者も欧米の学者の如くブロードな基礎の上に専攻に偏しない研究を行うべきではなからうか。而してかかる研究こそは進んだ意味で真にアカデミックなものである。

ry) が本学機関誌「法学論集」第一巻より現在にいたる既刊分一揃寄贈方要望している旨通知があつたので、早速第一巻より揃えて寄贈し、今後図書交換を行うこととなつた。

デューク大学より
図書寄贈

デューク大学出版部 (Duke University Press) から、本学「経済論集」との交換に、この程在記圖書を寄贈し、その書評を「経済論集」に掲載されたいと申込んで来た。

Duke University Commonwealth Studies Center, Commonwealth Perspectives, pp. 214, 1958, Duke University Press.



一九五八年度

国際学生会議西日本会議開かる

千里山学舎で

海外より多数の学生代表を招き、若人の自由な意見の交換を通じ、国際間の相互理解と親善に貢献しようとする日本国際学生会協（ISA）の第五回国際学生会議の西日本会議は、去る七月二十二日（火）より同二十四日（木）まで本学千里山学舎で華々しく開催された。

本年度のテーマは「若人と国際協力」で、これを政治、経済、社会、文化等の各分科毎の討論会が行われ、海外からはアメリカ、オーストラリア、フィリピン、台湾、香港、セイロン、カンボジア、インドネシア、タイその他、及び大阪、神戸、京都、奈良、名古屋各支部代表、当協会々員、他学生団体代表、一般学生等が参加し、流暢な英語で歓談する、なごやかな学生達の姿は、学園にふさわしい風情であつた。本学からも三名代表に選ばれて参加した。

全日本学生会計学研究会

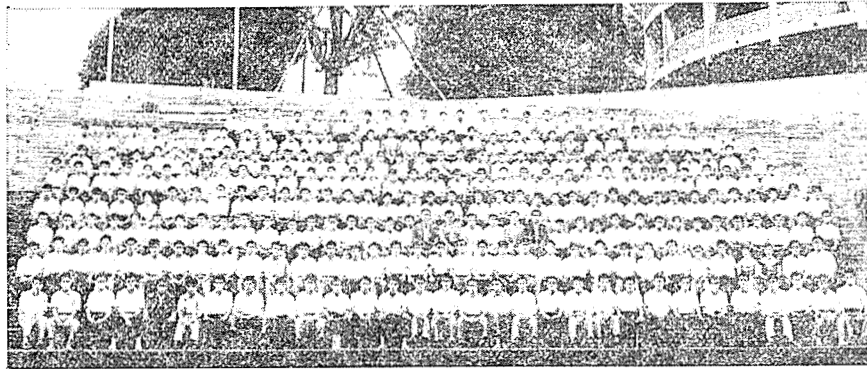
第四回全日本学生会計学研究会は関西大学商学研究部主催のもとに去る七月五日、六日の両日、関西大学千里山第三学舎で開催。大会は第一日目（五日）に自由論題、第二日目（六日）統一論題「固定資産会計」について、加盟校四五校中三八校約四〇〇名が参加、各大学の研究成果を持ち寄り、発表、討論し合つた。

七月五日（土） 午前八・三〇 幹事会（於 会議室）
 一、前年度会計報告承認の件
 二、次期開催校決定の件
 三、昭和三年度幹事校選定の件
 四、その他
 午前九・二〇 総会（於 第二講堂）
 一、開会の辞 西村 勉
 二、大会実行委員長挨拶 田村 滋
 三、関西大学商学研究部長挨拶 安田 信一
 四、幹事会報告 奥田 浜造

午前九・四〇 講演会（於 第二講堂）
 「原価計算の理念」 神戸大学教授 久保田 晋二郎
 「英米の会計七制度」 関西大学教授 植野 郁太
 午前一一・四〇 記念撮影

七月五日（土） 午後一の部

午後一・〇〇 自由論題
 第一部会（於 三〇三教室）
 講師 関西大学専任講師 清水 宗一
 「資本維持に関する若干の考察」 専修大学 平山 鶴次
 「期間損益計算に於ける耐用年数について」



八幡大学 西村 宏夫
 「減価償却問題生成基盤について」
 一とくにドイツ信用制度と関連において
 同志社大学 加藤 盛弘
 「資本維持について」 神戸商科大学 上田 尾義博
 第二部会（於 三〇四教室）
 講師 関西大学専任講師 末 政 芳信
 「資本剰余金に関する一考察」 関西学院大学 古林 万昌
 「租税と費用概念の拡大化について」 滋賀大学 坂 清司
 「発行持分説と主体持分説」 明治学院大学 川 畑 利弘
 第三部会（於 二二四教室）
 講師 関西大学助教授 酒 井 文雄
 「企業体理論に於ける利害調整とは何ぞや」 東京経済大学 吉野 賢治
 「ワラルブ金融経済的貸借対照表について」 同志社大学 石 原 肇
 「株式配当の性格」 横浜国立大学 福 谷 信良
 「後入先出法の分析」 神戸大学 山下 耕作

午後五・レセプション 神戸大学 山下 耕作
 （於 屋上）

七月六日（日）

午前九・統一論題（於 第二講堂）「固定資産会計」
 「物価変動並びに技術革新と減価償却」 神戸商科大学 豊田 崇雄
 「減価償却の本質について」 中央大学 伊藤 仁教
 「減価償却の本質に関する一考察」 福岡大学 森田 道義
 午後一・〇〇 統一論題討論会（於 第二講堂）
 司会者 関 西 大学
 午後三・三〇 講評及び講演（於 第二講堂）
 「固定資産会計」 大阪大学教授 木内 佳市
 午後四・三〇 記念品贈呈
 午後五・〇〇 閉会の辞 関西大学 西村 勉

夏期経営大講座開催

経営経済研究部(二部)では恒例の夏期経営大講座を左記要領で開催、参加者多数にて成果を取めた。

科目	日	時	講師
原簿計算	7月10・11・12		神戸大教授 溝口一雄
会計学	7月14・15・16		神戸大教授 阪本安一
監査	7月17・18・19		神戸大教授 近沢弘治
経営学	7月21・22・23		神戸大助教授 占部都美
商法	7月24・25・26		神戸大教授 八木木弘

会場 関西大学天六学舎
時間 午後六時～午後八時

バスケットボール部

関西学生バスケットボール、リーグ戦は十四日から阿倍野体育館で開催された。本学はその第一戦を同志社大学と争ったが73-63で惜敗した。

同大73(3835-132) 63同大

関西六大学野球リーグ戦始まる

秋の関西六大学野球リーグ戦は、九月七日正午から森之宮日生球場にて開幕された。今春に引き続き優勝を狙う関大は第一戦を神大と対戦して十七対零の大差でこれを破り緒戦を飾った。今後共いつその健闘が望まれる。当日のスコア1次の通り。

神大000000000000
関大3220051400017

関・関野球定期戦に五連勝

第六回全関・関野球定期戦は、八月三十日午後四時から関大・高対関学高の試合に続いて、森之宮球場で行われた。試合は全関大が四、五回に挙げた得点を守り切つて五連勝を飾った。当日のスコア1次の通り。

関学高0000001001002
関大1000000600X6
全関大0000231001002
関学高00000211010005

ラグビー部

関西ラグビー・シーズンの蓋あけ、近鉄対関大の試合は快晴に恵まれた十四日花園ラグビー場で午後二時から近鉄のキック・オフで行われた。試合は近鉄が一方的なペースで勝ち進み、本学は43-15で敗れた。

近鉄43(2419-10) 15関大

雄弁会四国に遊説

雄弁会(二部)は毎年夏期休暇中地方遊説を行つて大きな成果を挙げているが、本年も文学部飯田正一教授以下雄弁会学生三十名は、七月十三日より一週間、徳島県及び香川県下の高等学校や公民館に於いて熱弁をふるい、伝統ある関大雄弁会の名を一層高めた。

弁論部九州に遊説

弁論部(二部)学生十五名も本年も夏期休暇中八月十三日より十八日まで、九州地方(門司、直方、阿蘇、大牟田、博多、福岡)に遊説を行つて大きな成果を収め、一部雄弁会と相呼応して弁論部の名声を轟かせた。

学術研究部の合同調査

文学部鈴木祥蔵教授外三名を指導員とする民主主義文学、唯物論、社会科学及びアジア問題の四研究部学生二十名は合同で、「日本人口問題と移民問題の関連性について」、去る八月二十日より七日間、和歌山県太地町に於いて実態調査を行つた。

教育研修会開催 二部英語研究部

二部学友会の英語研究部では、毎年僻地の中学生に英語の研修会を開催しているが、本年も指導者文学部星野信夫助教と研究部学生二十五名は香川県小豆島内海中学校に於いて八月四日より九日まで開催、地元の人々に非常に好感を与へた。

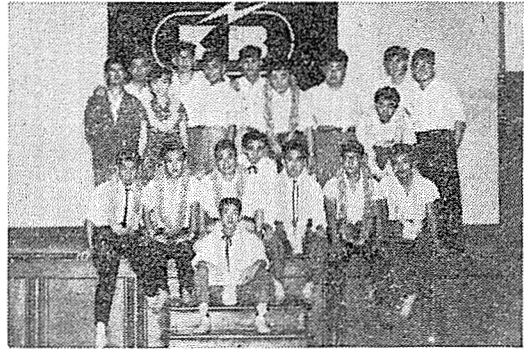
放送研究会夏期合宿

放送研究会では去る八月二十三日より二十九日まで一週間、高松、松山、山口等で合宿公演活動を行なつた。

文学部、金戸嘉七教授はじめ会員二十数名参加、四国、高松公演では丁度台風

にみまわれ公演開催が危ぶまれたが高松市在住の先輩、県人会の協力で放送劇二本、ポケット・シヨウ、金戸教授講演等を予定通り行なつた。高松講演の後会員相互の親睦をはかるために松山でゆつくりした一日を過ごし、再び海を渡つて山口に行き、前記高松と同じプログラムで公演、観衆の大喝采を浴びた。

山口での公演は関門支部校友会の方々の献身的な努力で多大の成果をおさめることが出来た。



大隈小学校に於ける公演

学研夏季公開講座

二部学術研究部では、第二回学研夏季公開講座を、七月七日(月)より同十九日(土)まで天六学舎で開催。多数の聴講者が参加して盛会裡に終了した。

- 七月七、八日 基本的人権と公安条令 関大 毛利 与一
- 同 九、一〇日 現代中国史 関大 貝塚 茂樹
- 同 一、一二日 現代ヨーロッパの経済思想 関大 杉原 四郎
- 同 一四、一五日 原子力と平和 市大 西脇 安
- 同 一六、一七日 人間の問題 神大 小松 撰郎
- 同 一八、一九日 現代文学思潮の問題 神大 小島 輝正



校 友 バ ッ ジ

校

友

校友会本部の動き

八月

この月は暑中でもあり本部、支部とも大きい動きはなく、各部が当面問題の協議で部会を開催した程度に終わった。

支部でも活発な動きがなく、九日に国税局支部が総会を開き、二十八日は大阪市十九番目の支部として都島が発会、いずれも校友会から役員が出席した。

五日 事業部会・午後六時、清交社

九日 大阪国税局支部総会・午後一時半

大阪国税局第一会議室・森川教授、大

月会長、長柄副会長出席

十二日 部長会・正午、清楓クラブ

十五日 広報部、機関紙「関大」八月号

(第三十九号)発行

十六日 総務部正副部長会・正午

十八日 財務部会・午後六時、清交社

二十日 広報部会・午後六時、天六学舎

評議員室

二十二日 組織部会・午後六時、天六学舎

評議員室

二十六日 財務部会・午後五時、天六学舎

評議員室

二十七日 総務部会・午後五時、天六学舎

評議員室

二十八日 都島支部発会式・午後六時半
桜宮幼稚園・大月会長、榎本、長柄副
副会長出席

大阪国税支部総会

大阪国税支部では八月九日(土)午後
一後半から大阪国税局第一会議室で総会
を開催。

開会の辞を支部長前川太良右門氏がのべて総会の議事に入り、まず前川支部長の年間経過報告、会計幹事荒井氏から会計報告、続く議題、会則改正の件が村上監事から上提、審議された。

役員改選問題は最初幹事が選出され、その幹事の協議によつて前川現会長が再選された。

この日出席の大月会長は祝辞とともに終身会費問題の現状説明を行った。森川太郎教授からは大学現況の報告の他、質疑に応えて、実務講習会、講演会などは教授陣の一員として出来るだけ協力したいと意見をのべた。また長柄副会長からも挨拶があり、総会終了後、ビールでのどをうるおして歓談、万才三唱、学歌斉唱をもつて閉会した。

当日決定役員

支部長 前川太良右門

名誉会長 吉田鹿之助

副会長 枝広徳、芝本正春

幹事 荒井広、河田治、黒井肇(以上常任) 上野、徳永、岩崎、山崎、村上、萩野

大分支部と拳法部が交歓

本学体育会拳法部の毎年夏季恒例の合宿練習が別府市内で行われたが、大分支部では別府市内の校友と協力、合宿所の幹旋等を行った。校友で拳法部OB得丸正雄氏らが尽力、旅館も校友経営の松屋旅館と定めて、今秋開催の全日本学生拳法選手権大会の三連覇をめざして猛練習を行い八月二十四日(日)無事納会した。大分支部長野田博氏ら同支部役員らから

部では別府市内の校友と協力、合宿所の幹旋等を行った。校友で拳法部OB得丸正雄氏らが尽力、旅館も校友経営の松屋旅館と定めて、今秋開催の全日本学生拳法選手権大会の三連覇をめざして猛練習を行い八月二十四日(日)無事納会した。大分支部長野田博氏ら同支部役員らから



ら協力、支援があり、納会当日は一堂に会して懇親会を開き、校友、現役が親しく語り合った。学生が大学の数々の歌を斉唱、校友の方からは、お国自慢が披露され和やかな雰囲気につつまれた交歓会を閉じた。

都島支部発会式

都島在住の校友の間で支部設立の準備

が進められていたが、八月二十八日(木)午後六時半から同区内桜宮幼稚園で発会式を開催した。

発会式は本本猛夫氏の司会で、まず発

起人の一人佐伯五郎氏の発会までの経過報告、つづいて発起人吉田虎雄氏から挨拶のべられた。議事進行のため小林旭氏が議長席につき、会則を逐条審議の末決定し役員選出に入った。支部長選出は協議した結果、設立にたずさわった世話人で指名することになり、世話人が相談、斉藤幸昌氏を推せん、満場一致の賛成を得て決定した。他役員は会則に基づき支部長の指名で決定。

来賓挨拶に入り大月会長の祝辞、斉藤支部長の閉会の辞につづき、ただちに懇親会に移り一同で発会を祝して乾杯、ビールで腹を冷やし、友情の方はあたためて歓談に時を過した。方々から珍芸が飛びだし陽気に語り合い、榎本、長柄副会長の祝辞、学歌斉唱と支部発会を祝う万才を三唱して閉会した。

当日決定役員

支部長 斉藤幸昌

支部長 奥田甚之助

熊本支部長に内田義信氏

吉田鹿之助熊本支部長が熊本国税局長を停年退職され、京都に転居されたので熊本支部では後任支部長について検討していたが、八月十五日(金)新支部長に内田義信氏の就任が決定した。またこれにともない副支部長には堤治助氏が就任した。

關西大學七十年史

A5判 本文 七〇〇頁

特製上質紙使用

資料編 一五四頁

布クロス美装

口 絵 五七頁

函 入

内容目次

- 第一章 関西法律学校の創業
- 第二章 河内町興正寺時代
- 第三章 江戸堀時代
- 第四章 福島時代
- 第五章 福島、千里山時代
- 第六章 千里山及天六時代
- 第七章 新制大学の時代
- 資料編 (関西大学七十年史年表その他)

刊 行 關 西 大 學

「關西大學七十年史」は、関西大学創立七十周年記念事業の一つとして企画されて以来、修史に、遺憾なきを期して着々進められていきましたが、この程完成をみましたことは御同慶に堪えません。本年史御希望の方には実費金壹千五百円(送料共)にて御頒布いたしますから何卒、大学出版部まで御申込み下さる様お願いします。

刊行取扱 關西大學出版部

昭和二十六年十月十五日第三種郵便物認可
昭和三十三年九月三十日発行(毎月一回三十日発行)

關西大學學報 第三一九号

九月号

編集兼

久井忠雄

発行所

關西大學出版部

印刷所

株式会社 ナニワ印刷所

電話堀川(35)二〇七二番
振替大阪二六七七二番

電話(35)七二七一

關西大學教授 壺井義正編
關西大學東西學術研究所員

關西大學泊園文庫藏書書目

第二編

A5判 二八〇頁
布クロス上製

大阪の庶民学苑を築いた藤沢東咳、南岳、黄鶴、黄坡先生と三世四代相繼がれた泊園書院の蔵書を黄坡元本学名譽教授故藤沢章二郎先生が長年の縁を以て本学に寄贈せられたが、本書はその貴重な蔵書書目の第二編である。なお、第一編は目下印刷過程中である。

目次

- | | | | | | | | | | | |
|-------|--------------|--------|--------|----------|---------|--------|----------|----------|------------|------------|
| 卷一 經部 | 第一 諸經類 | 第二 易類 | 第三 詩類 | 第四 書類 | 第五 禮類 | 第六 春秋類 | 第七 四書類 | 第八 孝經類 | 第九 諸經總義類 | 第一〇 小学類 |
| 卷二 史部 | 第一 正史類 | 第二 諸史類 | 第三 載記類 | 第四 詔令奏議類 | 第五 伝記類 | 第六 地理類 | 第七 職官政書類 | 第八 書目金石類 | 第九 史鈔史評史料類 | 第一〇 図表地圖類 |
| 才三 子部 | 第一 諸子合刻子類叢刻類 | 第二 諸子類 | 第三 芸術類 | 第四 類書類 | 第五 勅書書類 | 才四 集部 | 第一 楚辭類 | 第二 別集類 | 第三 總集類 | 第四 尺牘類 |
| | | | | | | | | | | 第五 詩文評詩文話類 |
| | | | | | | | | | | 第六 詩曲小説類 |

刊 行 關 西 大 學
刊行取扱 關西大學出版部